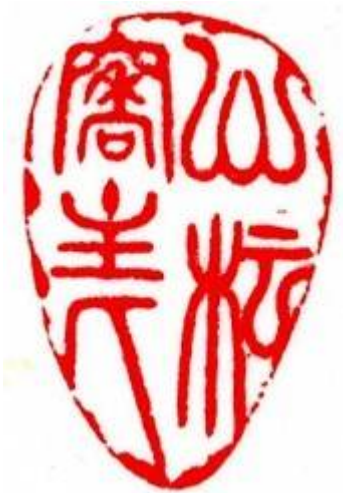


[やぶちちゃんの電子テキスト集：俳句篇へ](#)

[サイト 鬼火へ](#)

やぶちちゃん版 鈴木しづ子句集

(旧「鈴木しづ子句集」改訂増補版) 抄出二百十七句



「やぶちちゃん」注：

【旧「鈴木しづ子句集」版注記】彼女は著作権が継続中であるが、敢えて確信犯として公開する。その意図についてはBlogに記載した。また本テキストはランダム、独断的な旧字へ変

換、如何なる校訂も施していない全くのアウトローなものである。その辺をご理解の上、お読み頂きたい。【二〇〇五年七月十七日】

【旧「鈴木しづ子句集」の改訂増補版「やぶちゃん版鈴木しづ子句集」への新注記】先日、二〇〇九年八月に河出書房新社から刊行された鈴木しづ子の句集「春雷」「指環」合本（標題「夏みかん酸っぱいままさら純潔など」）及び同年同月同社出版の『KAWADE道の手帖』の「鈴木しづ子」（二句集に含まれない拾遺句を掲載）を遅まきながら入手、この私の旧頁の総ての句（ブログでも述べたとおり、殆どがネット上からの寄せ集めであった）について、校訂・詞書の追加・読みの挿入等を行った（但し、当該合本は新字表記）。表記上の誤植は殆んど見出せなかった（その点では私が蒐集した方々の引用が極めて正しいものであったことを言祝ぎたい）。その後、めちやくちやであった配列をそれぞれの二句集の順序に整序し（拾遺句は『KAWADE道の手帖』の編年形式と思われる拾遺句群に示された順に並び変えた）、パート副題のある『指環』はそれを示し、さらに今回の上記二冊の縦覧によって旧「鈴木しづ子句集」に含まれていない私の好きな句も採句、追加してある——但し、極めて禁欲的に、である——結果、採句数は全二百十七句となった。また、難読漢字の読みについても私の判断で補った（若い読者諸君を考えて振ったもので、河出書房新社版が独自に振っている左ルビとは——参考にさせて貰ったもの——同じではない。更に原則、歴史的仮名遣を用いた）。この仕儀によって、この私の「鈴木しづ子句集」は二〇〇五年七月十七日の公開時点の未校訂というアウトロー性から漸く抜け出すことが出来、格段に精密度を増した。本来なら句集『春雷』『指環』の総てをテキスト化してもよい覚悟のだが、万一、河出書房新社が著作権裁定制度に基づき使用権料を支払っている場合のことを考え、涙を吞んで以上の作業迄で止

めた。それでもなお、著作権上の疑義をお感じになる方は、私がブログで書いた確信犯の見解『[やぶちゃん版「鈴木しづ子句集」校訂に係るコメント](#)』を参照されたい。

なお、この旧頁以降、一貫して私が恣意的な正字変換を行っている意図を、以下に簡単に述べておく。

私は句集『春雷』『指環』の現物を見たことはない。昭和二七（一九五二）年に随筆社より刊行された第二句集『指環』はもとより、『春雷』さえも新字体であると考えてよいかも知れぬ。——しかし、である。

しづ子は大正八（一九一九）年六月九日神田に生まれ、東京高等淑徳女学校を卒業後（父親の強い希望で女子大学の受験をしているが失敗した）、昭和一五（一九四〇）年頃、主に軍需物資を製造していた東京日吉の岡本工作機械製作所に製図工・トレース工として勤務した。その職場で上司に誘われて同製作所内の俳句部会に所属して作句を始め、その指導に当たっていた俳人松村巨湫（きよしづ）に師事、彼の主宰俳誌『樹海』に参加するという経歴を持つ。彼女の第一句集『春雷』の刊行は戦後直ぐ、昭和二一（一九四六）年二月（羽生書房）である。

さて現在我々が普通に使用している新字体は大正一二（一九二三）年の「常用漢字表」の略字制定後、下ること、二十三年後の昭和二一（一九四六）年一月一六日に正式に告示された「当用漢字表」を経て、主に戦後になってその用字が公的一般基準となった漢字字体を言う。

しかし、私は敗戦時既に二十五歳であったしづ子は、やはり正字旧仮名遣が当たり前とする学校教育や特殊な社会集団（軍需品製造業・製図工）の中に所属していたと考えられるのである。彼女が句想を練る際、彼女の心の中の原型のイメージは、やはり正字によって示されたものであつたはずだと私は考えるのである（因みに画像で見る彼女の葉書の筆跡は流石

は製図工と思わせる非常に読みやすい、好感の持てる気持ちの良い字である。但し、それらは戦後のもので殆どが新字を用いてはいる。半分以上が敗戦前の作品である『春雷』はそうした可能性が高い。そして実際に新字で書き、新字で出された可能性が高い『指環』の時代にあっても、意識の中の詩想にあってはそれほど変わらなかったのではあるまいかと思うのである。これは例えば私が、大正の文人芥川龍之介の作品は正字以外には在り得ないと感ずるのと全く同じ理屈なのである。特に私は俳句という短詩形文学の場合、正字と新字では特に視覚的印象や解釈に大きな変化が生ずるものと信じて止まない人間でもあるのである。その複雑精巧象形具現連想飛躍超象徴的な正字のイメージは、ある種の詩想精神の「重さとして在る」——という立場を採るのである。

勿論、実際には『指環』について言えば、こんなとってつけたような牽強附会で、新字で示すのが正当とされる方が殆んどであろうとは思われる。が、同一ページ内の『春雷』を正字、『指環』を新字とするのは如何にも座り心地が悪い。その理由からも、私は敢えてページ内の全句を正字に代えて示したものである。私はしづさんは許して呉れるものと、勝手に思っているのである。【二〇一〇年八月十一日】

【二〇一四年九月二日追記】PDF版を作製した。横転する正字は仕方なく、新字としてある。

鈴木しづ子句集

I 第一句集『春雷』より 七十四句

いにしへのてぶりの屠蘇をくみにけり

（『春雷』巻頭句）

好物のかきもち母をとほく憶ふ

大寒の東京驛にひとを待つ

寒き夜やをりをりうづく指の傷

寒玉子うく徹宵の油の掌

寒の月畦くろの木の影うくろごきををる

雪の宿貨車の連結みてゐたり

貨車過ぐるひびきのつたふ雪の宿

たそがるる茜くろに畦くろの雪まだら

霜の葉やふところに秘む熱の指

霜ふむやけさの体温ひくかりき

夕風やあかねはなやぐ葱段畑

うすら日の字がほつてある冬の幹

凧やはやめに入れる孤りの燈

炭はぜるともしのもとの膝衣

いとしさの十の指はもかぜ癒えよ

冬雨やうらなふことを好むさが

梅の花癒えちかき日の茶いただく

春さむく掌もていたはる頬のこけ

北窓はほむらたちそめ縫ふ衣

図書館をいで夕ざくら散るをみる

ちりそむる櫻よみやこさかるなり

落日にきらめき立てり野の新樹

春雷はあめにかはれり夜の對坐

ノートするは支那興亡史はるの雷

筍飯や母はいくらかふとり在すま

とほけれど木蓮の徑えらびけり

省線のスバイクはげしぬれつばめ

嫁ゆく友のくちびるちさしつばくらめ

あめのおと太きうれしさ夏來り

母は病むどくだみ十薬の花咲きさかり

古本を買しろううて驟雨をかけて來ぬ

あめ去れば月の端居はしゐとなりはしゐにけり

旅の夜の夏冷えまさる樹のしづく

母とみて朝顔の蕾かぞへけり

かたかげや警報とかるる坂の下

炎天の驛みえてゐる草の丈

そびらより南風つよく出勤す

青葉の日朝の點呼の列に入る

防諜と貼られ氷室へつづく廊
ひむろ

爆撃はげし

東京と生死を誓ふ盛夏かな

昭和二十年八月十五日皇軍つひに降る
くだ

炎天の葉知慧灼けり壕に佇つ
た

なつものをしまふ梢の戻りけり
かげ

そのかみの東京戀ふる銀河かな

あはれあはれ秋がきてゐる蘆の青

秋すだれ捲く庭ぬちや夜雨くる

よさめ

秋の葉や昏れいろふかき躬のほとり

秋の葉のかさなりふかき小徑かな

宵闇やひとにしたがふ石だたみ

秋の蝶來そびれ風のものかげに

さうびたいふうけん

四季薔薇颱風圈に入りたるいふ

颱風のおぞましき夜ぞ壁の額

いちじくに指の繃帯まいにち替ふ

銀漢やひそかにぬぐふ肌の汗

ものかげに煙草吸ふ子よ晝の蟲

あきさめや指をそめたる塗料の黄

省みるばかりのひと夜天の川

あきぐさをふりふりいそぐ野路かな

あきのため衿の黒子をいはれけり

湯の中に乳房いとしく秋の夜

菊活けし指もて消しぬねや閨の燈を

長き夜や掌もてさすりしうすき胸

くちびるのかはきに耐ゆる夜ぞ長き

秋衣あめの東京はなれけり

夜の驛のとほきしほざる肉桂かむ

につぎ

穂芒のひとつ折れしが吹かれゐる

かがよふ波折れし芒をもてあそぶ

よきひとの妻をめとりぬ秋闌たけて

夫ならぬひとによりそふ青嵐

さかりゆくひとは追はずよ烏瓜

徹宵にのぞむ手袋はめにけり

冬の夜や辭しゆくひとの衣のしわ

年逝くや句を知りそめし花の頃

十二月の句帖の餘白そのままに

〔春雷〕掉尾句

II 第二句集『指環』より 百九句

「やぶちちゃん注：本句集は「きづつく玻璃」「春たつまき」「明星に」の三歌群から構成されている。歌群標題は一字下げで示した。」

きづつく玻璃

にひとしのつよ風も好し希ねがふこと

（『指環』巻頭句にして「きづつく玻璃」巻頭句）

柿秋葉東京ことば愛でられて

月蒼む吻くちふれしむる玻璃のはだ

たんたんつきかと降る月光げよ玻璃きづつく

春さむし髪に結ひたるリボンの紺

テニスする午前七時の若葉かな

穂の芒こころそまざることもきく

秋燈下こまかくつづるわが履歴

わが盞せんにゑくぼさづかり春隣

ははの忌きの棘きく美しき枳殼きくかな

欲ほるこころ手袋の指器さしに觸ふるる

寒の夜を壺碎つけ散る散らしけり

春たつまき

ひらく寒木瓜浮氣な自分におどろく

かんぼけ

〔春たつまき〕巻頭句

あひびきの夕星にして樹にかくれ

ダンサーになるか凍夜の驛間歩く

対決やじんじん昇る器の蒸氣

曇るる楨最後のおもひ逢ひにゆく
みぞ

春雪の不貞の面て擲ち給へ
う

体内にきみが血流る正坐に耐ふ

静謐せいひつに日墜つ理性と感情と

戀の清算春たつまきに捲かるる紙片

本屋の前自轉車降りるカンナの黄

死の肯定萬緑のなか水激ぎつた

肉感に浸りひたるや熟れ石榴ざくろ

實石榴のかつと割れたる情痴かな

かの映畫T市にきたる百日紅

好きなものは玻璃薔薇雨驛指春雷

すでに戀ふたつありたる雪崩かな

溺れきること尊しやすべて芽木めぎ

逆境のさくらはなびら舞はせけり

刺青とげきひと日逢はざるきこく枳殻かな

擲うたるるや崩れな哭くこと意識する

御身愛しめリラの押花送られたし

紫雲英げんげ摘みたりあなたの胸に投げようか

まぐはひのしづかなるあめ居とりまく

葉はさみあるふみをひらく白薔薇に

裸か身や股の血脈あをく引き

情慾や亂雲とみにかたち變へ

ひと戀ひの梅雨の弱星かかげけり

流星や戀戀として喰むはいちじく

墮ちてはいけない朽ち葉ばかりの鳳仙花

いまは言ふまじ秋あかつきを列なす鳥

甘へるよりほかにすべなし夾竹桃

萩幽くろしわたしの好きな季節となる

自棄にしてかくほどまでに明るむ月

病ら葉よかくまで戀ふと知られけり

木犀に歩く言はうか言ふまいか

月夜にておもひつづくるあらぬこと

短命や花もつ八つ手何本も

慾望や寒夜翳なす造花の葩はな

指環凍いっつみづから破る戀の果

明星に

花吹雪岐阜へ来て棲むからだかな

(「明星に」巻頭句)

黒人と踊る手さきやさくら散る

花の夜や異國の兵と指睦^{むつ}び

菊白し得たる代償ふところに

娼婦またよきか熟れたる柿食うたぶ

囊みぞれれけり人より貫ふ錢の額

涕なけば濟むものか春星と鋭くひとつ

春愁の煙草に點す火やくれなる

いまさらの如くにみるよたんぽぽ黄

かくまでの氣持の老けやたんぽぽ黄

ときをりは憶ふ或る事たんぽぽ黄

らつきは

落暉美し身の係累を捨てにけり

煙草の灰ふんわり落とす蟻の上

葉の蔭にはづす指輪や汗ばみて

明星におもひ返せどまがふなし

北風のなか昂ぶり果ての泪ぬぐふ

雷こんこん死びとの如き男の手

家すべて午前零時の露置けり

霧さむく思ふことにも疲れけり

動亂や白き花在る枯れの中

月の夜の蹴られて水に沈む石

屋にふるるおもむきみする月夜の葉

月の夜や重なることを好まぬ葉

かしこくて姿よそほふ月夜の葉

惜しみなくなまめき光^てらふ月夜の葉

月の現れさとるにあらず葉なまめく

おのおの葉月のひかりにきそひけり

星凍てたり東京に住む理由なし

熱哀し蒲團のそとに置く片手

美濃の雪つまさき踏みて來たりしなり

冴え返る劍山は深く水に沈み

凍蝶いってふに蹤つきて日蔭を出でにけり

月明の橋を越ゆれば町異なる

菊は紙片の如く白めりヒロポン缺く

コスモスなどやさしく吹けど死ねないよ

倅ちうすき頤持つや蘭寒み

歸る歩や先づ火をおこすべしとのみ

木枯しや坐せば雙つの膝頭

ことりといふあれは落ちたる焜爐の火

海の霧復かへるなくして渡るべきか

雪の夜を泪みられて涕なきにけり

黙々と小包つくる春の雷

頒ち持つかたみの品や青嵐

大阪へ五時間でつく晩夏かな

夏帽の大阪訛りより買ふ繪

遊廓へ此の道つづく月の照り

夏みかん酸っぱしいまさら純潔など

この暑さ町に看板ごてごてである

親のことかつておもはず夾竹桃

短夜の夢の白さや水枕

風鈴や枕に伏してしくしくな泣く

炎天のポストは橋のむかふ側

ひまはりを植ゑて娼家の散在す

乳房もつ犬に蹴つけられ夕焼雲

曆日れきじつやみづから墮ちて向日葵黄

蟻の體にジュツと當てたる煙草の火

好きことの電報きたる天の河

朝鮮へ書く梅雨の降り激たぎちけり

(「明星に」掉尾句にして『指環』掉尾句)

Ⅲ 拾遺句群より 三十四句

「やぶちゃん注：しづ子の俳句は師松村巨湫に昭和二七（一九五二）年九月十五日附で句稿を送ったものが最後となった。本拾遺句の後半、昭和二八（一九五三）年二月号以降の四句の『樹海』掲載句については、しづ子失踪後、手元に残った多量のしづ子の句稿を、巨湫が、その死の前年である昭和三八（一九六三）年十月号の『樹海』まで、あたかもしづ子が投句をし続けているかのように掲載し続けたもので、時系列からは外れるものである点に注意されたい。」

秋葵みづをこえたる少女の脚

（昭和二二（一九四六）年十二月号『樹海』掲載句）

鳳仙花なみだぐみたる二つの眸

(昭和二二(一九四六)年十二月号『樹海』掲載句)

性悲し夜更けの蜘蛛を殺しけり

(昭和二三(一九四八)年六月号『樹海』掲載句)

意識

ほろろ山吹婚約者を持ちながらひとを愛してしまった

(昭和二三(一九四八)年七月号『樹海』掲載句)

薔薇の夜や深く剪りたる指の爪

(昭和二三(一九四八)年 七月号『樹海』掲載句)

黒人兵の本能強し夏銀河

(昭和二六(一九五二)年 六月 八日附未発表投稿句)

雪はげし妻たりし頃みごもりしこと

(昭和二六(一九五二)年 八月二四日附未発表投稿句)

雪はげし月を経ずして葬りしこと

(昭和二六(一九五二)年 八月二四日附未発表投稿句)

たぎ
激つ雪自ら葬りおほせけり

(昭和二六(一九五二)年 八月二四日附未発表投稿句)

雪紛紛麻薬に狂ふ漢の眼

(昭和二六(一九五二)年 二月二九日附未発表投稿句)

母の墓建つ

墓の中母の墓置く霜柱

(昭和二六(一九五二)年二月一日附未発表投稿句)

横濱に人と訣れし濃霧かな

(昭和二六(一九五二)年二月一九日附未発表投稿句)

墮胎児が三歳となるああ正月の繕の箸

(昭和二六(一九五二)年二月一九日附未発表投稿句)

戀初めの國文の師よ雪は葉に

(昭和二六(一九五二)年二月二四日附未発表投稿句)

死の豫感つと立てば體の寒き影

(昭和二六(一九五二)年二月二四日附未発表投稿句)

いつの日か雪に曝さむこの體の屍

(昭和二六(一九五二)年二月二四日附未発表投稿句)

傲然と雪墜るケリーとなら死ねる

(昭和二六(一九五二)年二月二四日附未発表投稿句)

タイプ打つWの當^あつる汗の指

(昭和二七(一九五二)年中の未発表と思われる投稿句)

霧五千海里ケリー・クラツケへだたり死す

(昭和二七(一九五二)年一月二日附未発表投稿句)

急死なりと母なるひとの書乾く

(昭和二七(一九五二)年 一月 二日附未発表投稿句)

文箱を見られし記憶栗の花

(昭和二七(一九五二)年 一月二〇日附未発表投稿句)

三歳とかぞへて愛し水中花

(昭和二七(一九五二)年 六月一五日附未発表投稿句)

墓地に來て風の在り處を地に探す

(昭和二七(一九五二)年 七月二四日附未發表投稿句)

劇薬の劇と銘うつ暑氣極む

(昭和二七(一九五二)年 八月二九日附未發表投稿句)

死にどころどころゑがくや月に雲

(昭和二七(一九五二)年 八月二九日附未發表投稿句)

意のままの二十七年夏氷

(昭和二七(一九五二)年 九月 二日附未発表投稿句)

秋めきの雲を詠みしを終りとす

(昭和二七(一九五二)年 九月 二日附未発表投稿句)

秋の雲ゆくおもふは鈴木しづ子之墓

(昭和二七(一九五二)年 九月 二日附未発表投稿句)

薊吹き死期が近づく筆の冴え

(昭和二七(一九五二)年 九月 二日附未発表投稿句)

よそながらまみゆることや薊の葉

(昭和二七(一九五二)年九月九日附未発表投稿最終句)

死してわれに残すものなし鳳仙花

(昭和二七(一九五二)年 九月一五日附未発表投稿句)

悲劇はこの世だけでいいスクリーンの白雪

(昭和二八(一九五三)年二月号『樹海』掲載句)

夕焼の失せし地をゆく乳母車

(昭和三一(一九五六)年七月号『樹海』掲載句)

鴉鳴くや沼に棄て來し戀一つ

(昭和三一(一九五六)年八月号『樹海』掲載句)

傾くやいつさい了^をへし雪の墓

(昭和三一(一九五六)年一月号『樹海』掲載句)

……「みなみむと、こしきのむとよみ、いぬいむとみ……」

——これが

——昭和二七（一九五二）年三月三十日

——意に沿わず嫌々出版した歌集『指環』

——その東京の出版記念会での

——しづ子の

——最後の言葉である。

……

——そして

——この肉声を最後に

——しづ子は我々の前から

——完全に姿を消した。……

——二〇一四年の今

——彼女は九十五歳になっているはずである………